

法華経①

唯一真実の教法 法華経の構成と迹門まで

法華経とは

釈尊は成道を遂げた後、四十二年の間、衆生の機根きこんに応じて多くの経々を説きました。しかし、それらの諸経は「法華経」という最勝真実の教えに導くための方便かり（権の教え）に過ぎませんでした。このことについて釈尊は、法華経の『方便品第二』に、

「正直に方便を捨てて 但無上道ただむじょうどうを説く」（法華経 一二四ジ）と説き、また『法師品第十』に、

「此の経は、方便の門を開いて真実の相を示す」（同 三二八ジ）

と説いて、法華経こそが真実無上の教えであることを明かされています。

法華経の構成

法華経は一部八卷二十八品から構成されていますが、開経かいきょうの『無量義経』一卷と、結経けつきょうの『観普賢菩薩行法経』一卷とを加えて、「法華三部経」とも「法華経十卷」とも言われます。

法華経『序品第一』から『安楽行品第十四』までの前半十四品を「迹門」と言い、後半の『從地涌出品第十五』から『普賢菩薩觀発品第二十八』までの十四品を「本門」と言います。

なお、法華経は「序分」「正宗分」「流通分」の立て分けをもって説法されており、序分とは序論に当たる部分、正宗分とは中心となる教法が説かれた部分、流通分とは正宗分の教法を後世に流布することが説き示された部分を言います。

法華経の特長①

迹門の特長

二乗作仏（開三頭一）

法華経迹門の特長は、爾前経では成仏できないとされてきた声聞・縁覚の二乗に対し、成仏の記別が与えられたことにあります。これを「二乗作仏」と言います。

法華経迹門『方便品第二』に至り、「諸法実相・理の一念三千」の法理が説き明かされ、空無の悟りに陥った二乗といえども、妙法の真理から隔絶されるものではなく、他の衆生と同じく成仏することが可能となりました。

これは、法華経以前に三乗（声聞乗・縁覚乗・菩薩乗）を差別して教導してきた教えを方便として払い、法華経こそ一切衆生をおしなべて成仏へと導く一乗真実の教えであることを略して示しているの、「略開三頭一」と言います。そして、この開三頭一を広く説き明かしたのが、続く「広開三頭一」です。

広開三頭一の説法では、まず仏の出世の目的は一大事因縁をもって、一切衆生に仏知見（仏の智慧）を開かしめ、それを示し、悟らしめ、入らしめて清浄なる成仏の境界に

入らしめることにあると宣説せんぜつされ、次いで、法華經以前に三乘各別の教えを説いたのは一仏乘に導くための方便であったことが述べられます。

そして『方便品第二』から『授学無学人記品第九』までの八品にわたり、三周ほつせつしゅう（法説周・譬説周ひせつ いんねんせつ・因縁説周）の説法をもって、二乗作仏が説き明かされ、さらに『法師品第十』において凡夫の成仏、『提婆達多品第十二』において悪人・女人の成仏が説かれました。

ここに二乗を中心とするすべての衆生の成仏が可能となり、一念三千の法門が確立したのです。

今回は、本門の特長、法華經の付嘱、熟脱と下種について掲載します。

